

灌頂伝についての一考察

佐々木 章 格

灌頂伝についてはこれまで多くの研究があるが、その果した役割を伝記によつて考察するため、再度取り上げることとする。資料は天台三大部・国清百録・涅槃玄義・智者大師別伝、その他統高僧伝・涅槃玄義文句及び発源機要を用いた。

灌頂は天嘉二年（五六一）に臨海県の章安に生れ、字は法雲、俗姓は呉氏と号し、光大元年（五六七）七歳にして摂静寺の慧拯法師に就いて出家し、二十歳で具足戒を受けた。慧拯は涅槃の学者であつたらしく、灌頂は涅槃經を学んだのである。この時期にすでに涅槃思想の芽ばえがあつたわけであるが、師が減するに及んで十数年間いた摂静寺を去り、本箱を背おつて足をつて天台山に向けるのである。摂静寺にいるころすでに智顗のうわさを聞いていたことであろう。（以上摂静寺時代）

そして灌頂は至徳三年（五八五）、智顗が陳の少主（永陽王）の招きによつて隠棲生活を終り、天台山より金陵に向うために山をおりの所で出会うのである。この時以後灌頂は病氣で豫章に滞在するまでの約十年間智顗と共に行動したとみてさしかえないであろう。まず灌頂は智顗に従ひ至敬寺に至り、次に靈曜寺に移り、大極殿で智度論・仁王經を聞くことにあずかり、その後光宅寺に移り禎明元年（五八七）にこの光宅寺で法華文句を聴講することになるのである。

る。常隨二年目のことで法華經聴講が目的ではないにしても、これを筆録し後に整理するだけの価値のあつたものに違いない。しかし金陵が戦乱となるに及んで智顗の一行は廬山に行くことになる。その後揚州において晋王に菩薩戒が授けられるが、再び廬山にもどり諸方を巡つて荊州に到着し、開皇十三年（五九三）玉泉寺で法華玄義、翌年には摩訶止観が講説された。灌頂三十三、三十四歳に渡つてであり、智顗の思想を十分に接取り筆録されたものであろう。その翌年、智顗は晋王の浄名疏についての招きにより揚州禪衆寺に行くのであるが、灌頂は病氣のため豫章で静養することになる。ここで約二年半の歳月が流れ、開皇十七年再び智顗のもとで学ぼうとして江都に行くが、智顗はすでに天台山に帰つてゐることを知り、秋に仏隴に着くのである。この頃のことを智者別伝を見ると法華玄義と摩訶止観のある程度のもんができていたのである。静養中になし得たものであろうが、智顗はその冬に入滅してしまふのである。（以上智顗常隨時代及び静養期間）

智顗滅後、涅槃經云云よりも重要な問題は天台教団の護持である。智顗在世当時、王朝との関係は政治的意図が含まれ、灌頂は智璵普明等と共にその役割を果たさなければならなかつた。まず開皇十八年（五九八）のはじめには普明と共に晋王への遺書等を持つて揚州の晋王のもとへ行き、開皇二十年（六〇〇）には智璵と共に祝賀使として派遣されている。仁寿元年（六〇一）には晋王と灌頂智璵の間で智顗の靈異についての問答があり、皇太子敬靈龜文等を持つて天台山に帰り開龕した。また翌年には慧日道場で慧莊法論に浄名經を講じさせたところ智顗の疏を用いていたので、晋王は智顗の法華の義に通達する者に疏を持つて上京せよといい、これには灌頂が選ば

れている。そして天台山へ帰つて間もなく長安ので法華疏の三夏蘭弘を行なつてゐる。また大業元年（六〇五）に智瑛が揚州に派遣された際に、智顗伝について弟子灌頂記録して行状一卷ありと答えており、智者大師別伝のおおまかなものがすでに出来ていたのである。また国清百録も智寂のあとを受けて作成されつつあつた。そして日嚴寺靜論の後は咸陽より桃林（華陰縣、幽薊（幽州と薊州）と行き、大業七年（六一一）の煬帝による涿野招引に応じ、大業十年（六一四）には天台山で涅槃經を推度している。しかし隋末の戦乱により天台山から沃州山、遂安（鄧氏に浄名經を講ず）、柵城（仙居県か）、遂安と移り、次に安州に至つては隋末唐初の戦乱もおさまつて、戴氏の重席にも加わり武徳二年（六一九）には涅槃玄義一卷・疏十二卷が完成するのである。（以上僧使時代、涅槃玄疏作成時代）

これより以後七十二歳で入滅する貞観六年（六三二）までの十三年間の行状は不明であるが、おそらくは主に天台山に住し、智顗講説の筆録本を整理結集し自らの講説をも行なつたと思われる。この間の事せきとしては貞観元年（六二七）に智暉が入滅するに際し、六年後灌頂が兜率天に昇つて法を説くこと等がうかがえる。その他統高僧伝では靈異的なものがあげられているが、いずれもいつの出来事かは不明である。かくして貞観六年（六三二）八月七日国清寺で入滅し、南山に葬られたのである。（以上著作整理時代）

以上灌頂の生涯を簡単に述べたが、私はとりあえずその時代区分を幼少時代より撰静寺時代、智顗常随時代、静養期間、僧使時代、涅槃玄疏作成時代、著作整理時代と分けてみた。

まずはじめに撰静寺時代には二十歳で具足戒を受け涅槃思想の芽

ばえが見られるが、その他特別な事からはなかつたようである。

次に智顗常随時代には今日いわゆる天台三大部と呼ばれる法華玄義・法華文句・摩訶止観の講義を受けたほか、その他の經典の講義も受けたものとみられ、その最後の豫章での静養期間には早くもその筆録の整理をはじめてゐることに注目せらるべきであろう。

そして智顗滅後僧使時代に入り、自らは隱居して世を終るうとしていたらしいが、この時すでに灌頂は天台衆を代表する僧使となつていたのである。さらには仁寿二年、晋王が法華の義に通達する者を一人上京させよと勅しているが、この時灌頂が選ばれたことは、名僧使としての天台衆代表と共に智顗の教學的繼承者の第一人者としても認められていたことを意味するものではないだろうか。

この後隋煬帝の衰微により僧使よりまぬがれると再び涅槃經を推度している。このことは灌頂にとつて涅槃經がいかに重要であつたかを物語るものであらう。

この涅槃玄疏作成後、灌頂の動行は不明であるが、入滅するまでの間おそらくは筆録本の整理結集にあたつたものと思われ一応著作整理時代とした。またこの時期には前の隋王朝の時のような交流が、唐王朝との間にはなかつたようである。このことは灌頂以後天台からすぐれた僧が出なかつたのと合せて第一期暗国時代に入つて行く前兆を示すものであらう。

今日智顗説灌頂記の典籍が数多くあり、灌頂は結集の巨匠として仰がれ、天台宗二祖としての確固たる地位を得ているが、その他に名僧使としての智顗滅後の天台教団の護持者、さらには涅槃經の学者としての灌頂を見落としてはならないであらう。（註省略）